

## 第4節 教職員・学生版KUG（東京家政学院大学）の実施

酒井 治子（東京家政学院大学 人間栄養学部）

### 1 はじめに

教職員・学生版のKUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）を、2025年1月1日、東京家政学院大学にて実施した。本学でははじめての実施であったが、学生のみの実施ではなく、運営を担う教職員も同時に実施することとした。東京大学廣井研究室とSONPO リスクマネジメント株式会社により開発されたKUG（Ver.1）に準拠しつつ、運営において発生する課題について机上で疑似体験し、帰宅困難問題に対する理解と支援施設の運営のための具体策を見出すために実施した。

### 2 準備

#### 2.1 キットの用意

各チームに、①施設平面図面（避難施設となる体育館の図面を50分の1縮尺で布のシート化したもの）を用意する。②帰宅困難者カード、③帰宅困難者コマ、④イベントカード、⑤ミニチュア看板、⑥受け入れ対応記録、⑦あらかじめ抽出したイベント一覧を用意した。

#### 2.2 本セミナーの実施までの準備（緊急対応マニュアルの確認、備蓄倉庫等）

KUGの目的の一つとして、大災害時のマニュアル整備に資するということがあるが、本学では帰宅困難者支援に関するマニュアルが存在しない。具体的には、千代田区と「大規模災害時における協力体制に関する基本協定」を締結していることによる実施の備蓄品や避難場所が確保されている程度であった。本件セミナーを実施することにより、千代田学の共同事業を管轄する学術・社会連携室と、大学全体の防災関係を所管する総務課が連携する機会となった。

今回のセミナーに実施にあたり、オンラインコミュニケーションツール（Discord）のコミュニティ「千代田区コンソ防災ネットワーク」内にチャンネルを開設し、参加者に招待状を送付した。

### 3 参加者のリクルート

学生に対しては酒井がセミナーの趣旨を説明し、リクルートした。教職員は本学の社会連携室が学内外にメールにて、セミナーへの参加を呼び掛け、希望者を募った。

参加者の内訳は次のとおりである。参加者は、大学人間栄養学部人間栄養学科地域栄養教育研究室に所属するゼミ生8名、専修大学の学生1名、本学の教職員8名と法政大学の職員1名の計18名となった。ファシリテーターはKUGの経験者が担うこととした。

### 4 プログラムの流れ

KUGを実施する前段として、3年生、4年生の研究発表の内容と盛り込み、学生の教育活動の一環という形で実施した。学生が主体的に参加することと共に、教職員が避難訓練としてのみ

ならず、学生教育の一環でもあることを意識しやすいためである。その他、基本的には一般的なKUGのフォーマットを踏襲した。以下が当日のタイムテーブルで構成した（図1）。

項目	講師	時間
1 本日の流れ	酒井	13:00~
2 報告 人間栄養学部人間栄養学科 科目「栄養教育実習Ⅱ」 学生が発信する「災害時の栄養・食生活に備えるための栄養情報」	酒井	13:10~
3 備蓄倉庫の見学	峰尾	14:00~
4 帰宅困難者受け入れ施設の見学	峰尾	14:30~
休憩		
5 帰宅困難者支援施設運営ゲームの説明と体験（研究説明）	酒井	14:50~
6 まとめ		16:30

図 3.4.1 セミナーのプログラム

#### ① 実施

(ア) 導入から帰宅困難者支援の概要を把握するまで

2025年1月11日（土）、東京家政学院大学でKUGを実施した。今回は、3チームに分かれて実施した。進行役は酒井が務めた。

配布資料としては、個人用にはスライド資料、5大学備蓄品リスト、KUG研究対象者への説明文書、同意書／同意撤回者を、チームごとにはKUGイベント一覧、KUG受け入れ対応記録様式を用いた。帰宅困難者支援の意義と本日のセミナーの流れ、総合司会を酒井が担当した（図3.4.2, 3.4.3）。



図 3.4.2 本日の内容の説明



図 3.4.3 千代田区共同研究事業の説明

#### (イ) 報告内容

今年度は外部からの講師ではなく、人間栄養学部人間栄養学科 科目「栄養教育実習Ⅱ」の授業の成果発表という形で、「学生が発信する災害時の栄養・食生活に備えるための栄養情報」についての発表や質疑応答を行った。災害時の栄養・食生活に備えるための情報発信の方法として、動画や紙面教材を用いた計画や評価が行われた。詳細は本報告の第4章をご参照いただきたい(図 3.4.4)。

自然災害のような非日常時の食生活を考えることで、何を大切にし、どのような行動をとるべきなのか、さらに、そのためにどのような知識やスキルを持つことができるように支援すべきか、学生の目線で5つの提案が行われた。教材として、動画やパンフレット教材、レシピが提示された。



図 3.4.4 千代田区共同研究事業の説明

#### 施設見学

約 30 分程度、全員で備蓄倉庫および帰宅困難者受入場所に指定されている施設の見学を行った。千代田区に申請している帰宅困難者の受入場所は体育館の地下 1 階のサブアリーナ部分である。これに加え、地下 2 階の第 1 体育館、第 2 体育館、地上 2 階のアリーナを含めて使うことで実施した。混雑を避けるために、備蓄倉庫から巡回するチームと、受入場所から巡回するチームの 2 つに分かれて実施した。備蓄倉庫（2 号館 3 階）と受入場所までに階段があり、受入場所への移動に時間がかかることが想定された。また、保管状況を見ると、大量の段ボール箱が積み上げられており、すぐに必要な物資を取り出すことができない状況であった。

帰宅困難者の受入場所は体育館である。館内に階段や段差があり、車椅子の方や、歩行に困難がある方を受け入れることは大きな問題であることが予測された。スロープを設置することや、歩行に困難がある方の待機場所を入口近くに設定し、対応できるようにする必要性が指摘された。

備蓄倉庫や受け入れ施設の見学を終えて感じたことを表 3.4.1 の通りであった。保管場所の地図や、搬出のための通り道等を確保し、倉庫の入り口付近に図式化する等の配慮が必要であるという声が寄せられた。備蓄倉庫を受入場所の近く、搬入出しやすい場所に設置する必要が共有されたが、そのための空間を確保する課題が明らかになった。まずは備蓄倉庫の存在自体をより多くの学生や教職員が認識すべきであるとの声があがった。



図 3.4.5 帰宅困難者受入場所と備蓄倉庫の配置



図 3.4.6 帰宅困難者支援施設用の備蓄倉庫の見学状況



図 3.4.7 千代田区が選定している備蓄品(帰宅困難者用)



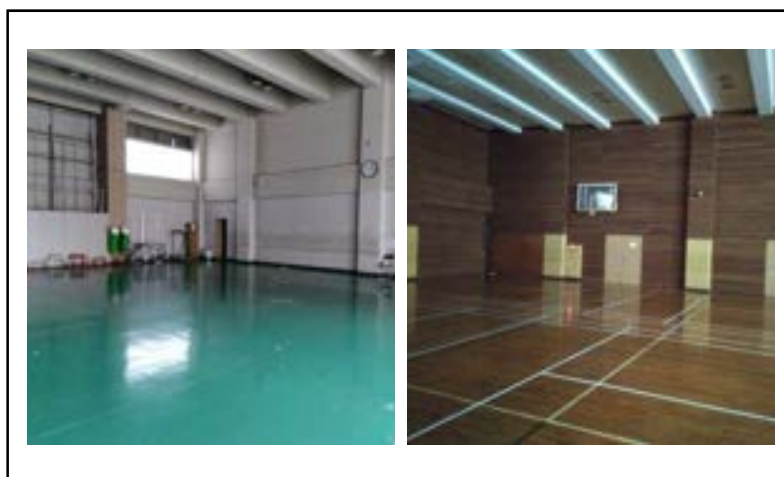


図 3.4.8 千代田区に申請している避難施設（帰宅困難者の方向け）



図 3.4.9 防災担当部署から備蓄品や防災対策について説明を受ける

表 3.4.1 備蓄倉庫・帰宅困難者受け入れ施設の見学を終えて感じたこと・気づいたことは

分類	内 容 (件数)
備蓄倉庫 の場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け入れ施設の近くに備蓄倉庫が欲しい(5)</li> <li>・倉庫から荷物を全部運ぶのにどのくらい人数と時間が必要なのか気になる</li> <li>・女性及び子どもだけしか受け入れていないから、2階に備蓄して運ぶことが大変だ(4)</li> <li>・倉庫は学内関係者でも迷いそう</li> <li>・中学の校舎は廊下が狭いので、中学生がいたら混雑する</li> </ul>
倉庫内の 備蓄方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・倉庫のどこにないがあるのか、一目でわかる必要がある(3)</li> <li>・倉庫内が緊急時に見つけやすくなっている必要がある(4)</li> <li>・入口の近くにすぐに使うものがあると良い。</li> <li>・棚がしっかりと固定されていたが、地震の揺れで棚から落ちないか、入口が危険(2)</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段ボールが重くならないように、小分けにして保管が必要。</li> <li>・下の段ボールを出しやすいように保管する手立てが必要</li> </ul>
備蓄品の管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電話や道具については、年に1回が使用し、確認が必要。</li> <li>・食品の消費期限を見やすく段ボールに貼っていて、わかりやすい(2)</li> </ul>
備蓄品の種類や量	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け入れスペースにプライバシーを守るための仕切りが用意しておくが良い(2)</li> <li>・アルファード化米の備蓄を増やす(2)</li> <li>・アレルギー反応の食品が備蓄されていてよい</li> <li>・被災者の生活に必要なものが多く備蓄されていることに気づいた</li> <li>・備蓄品が分散されていて、災害時のことが考えられていると感じた(2)</li> <li>・多くの備蓄品があり、女性や子どもが必要なものもあり、安心が得られた(3)</li> </ul>
受け入れ施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育館は冬場寒く、夏場は暑いから、場所の変更が必要(3)</li> <li>・受け入れ時に、外部者と学生と混乱しないか心配</li> </ul>

#### (ウ) KUG実施

KUGの趣旨や進め方について、説明を行った。説明スライドと同じ資料を手元に配布しながら、(1)～(5)のプロセスのどの部分を実施しているのか確認しながらすすめたため、理解を進めることができたと考える。



図 3.3.10 KUGの進め方

#### (1) 役割分担を決める

施設管理者、情報連絡係、受付係、支援物資配布係、安全係、誘導係、負傷者対応係役割分担を決めたが、実際にゲームを進める上で、各自の役割認識が薄れてくることもみられた。

#### (2) 受入基本方針を決める

帰宅困難者を実際に受け入れていくに際しては、どういう人を受け入れるのか／入れないのか、ゾーニングをどうするか、受け入れの手順（名簿作成など）はどうするか、などあらかじめ決めておかなければならないことがいくつもある。施設のレイアウト、動線、受入時に配布する備蓄品等を確認して、ミニチュア看板類を、施設平面図面の上に配置した。この段階で、帰宅困難者の振り分けのために、体育前にテントを設置することで、受入のための情報整理を進めることが

できるとの意見もみられた。

### (3) 帰宅困難者を受け入れる

帰宅困難者カードと帰宅困難者コマを用いて、受入を行った。本学で受入対象としているのは原則、女性及び子どもが対象である。受け入れた帰宅困難者に対応する「帰宅困難者コマ」を施設内レイアウトに基づき配置した。帰宅困難者カードは名簿として整理し共有することが望まれるが、今回は名簿作成までできなかった。

この帰宅困難者カードをめくるたびに、受入を想定していない帰宅困難者に遭遇し、受入ができないもどかしさが募ることを体験した。各チームからは対象を限定することそのものが現実に対応できないのではないかと、特に家族での避難を希望された場合、家族の一部のみの受入拒否ができるのだとうかと、いずれのチームでも疑問の声が上がった。受け入れ対応記録には、判断に困った受け入れ対象者の No.を書き、困った理由、取った対応についてまとめたが、その大半はこの受入想定していない男性への対応であった。現実的に即して、受入をしない男性の帰宅困難者をどのように他の避難施設等に誘導するのか、連携した支援をしていくための体制を検討しなければならないことが明確になった。

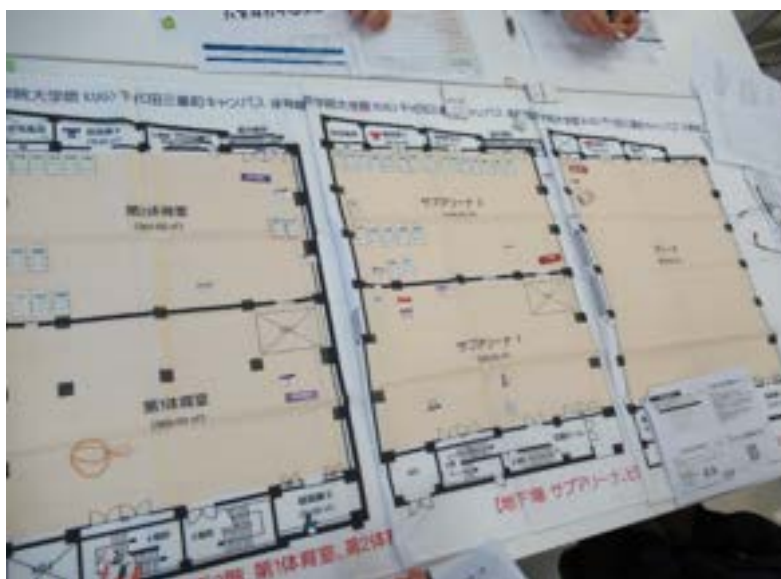


図 3.3.11 帰宅困難者コマの配置

### (4) イベントへ対応する

様々な事態を想定してイベントカードがKUGに設定されている。そのカードをめくることで新たなイベントを展開していくが、今回は事前に対応していくイベントを表にまとめておき、事前に定められた順番で、一つのイベントへの対応の方針が決まったら次に移る、という形をとった。学生チームは一つ一つのイベントに真摯に向き合いながら、13~14のイベントを処理していた。教職員チームは効率よく約20個のイベントすべてを処理していた。

### (5) 施設を閉鎖する

施設の閉鎖に向けて、施設内にいる帰宅困難者への対応を検討してもらった。しかし、ゲームが終わったような安堵感が各チームにあり、帰宅困難者の受け入れよりも閉鎖場面では緊張感に



かける様子もみられた。実際には、帰宅経路に不安があったり、健康状態も万全でなかったりする帰宅困難者が施設から退去し、施設を閉鎖するのは時間も労力もかかると推察された。



図 3.4.12 KUG作業風景



図 3.4.13 KUG作業風景

(エ) ふり返しセッション

約10分程度、教職員チーム、学生チームのチーム毎に、KUGのふりかえりシートを記入する形で気づきを共有し、施設運営の役割分担、受け入れた帰宅困難者への対応、イベントへの対応に加えて、KUGのゲームの内容、イベント事例アイデアについて、各自が気づいた点を集約した(表 3.4.2)。

単に文字化したマニュアルのみで共有するのではなく、図上訓練であるKUGを用いることで現実性を持ったシミュレーションができ、課題を浮き彫りにできる特徴が活かされるワークショップとなった。

帰宅困難者支援という新たな気づきが大きく、KUGのゲーム自体についての改善といった点まで考えることが難しかった。



図 3.4.14 振り返り

表 3.4.2 KUG を振り返って

分 類	内 容
受入対象とその対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受付で、帰宅困難者の仕分けが重要(2)</li> <li>・けがや体調不良の方、妊婦、傷病者、障害者、ペットを連れてきた方等の対応を考えておく（誘導場所のゾーニング）(9)</li> <li>・外国人をどのように対応するか、本当に断ることができるのか、その対応できるようにすべき(7)</li> <li>・団体の方は一緒に受け入れ場所にすることで安心感が持つことができる(7)</li> <li>・男性は他の施設への移動を依頼したが、実際にその対応ができるのか(2)</li> <li>・家族で利用希望者があった場合の対応(2)</li> <li>・要介護の高齢者を受け入れる場合は、介護レベルを考慮する必要がある</li> <li>・認知症のある高齢者への対応や、薬の必要な方への対応等、対処方法の検討が必要</li> </ul>
受入にあたって事前の対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授乳やおむつ替えのスペースを確保するために、事前に設定することが必要(4)</li> <li>・受け入れの前に、レイアウトの設定を考える必要がある</li> <li>・受け入れを限定するのであれば、それがわかる看板等の表示が必要</li> <li>・インフォメーションは何語で表示するのか、考えておくことが重要。</li> </ul>
受入者の運用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救護室は喚起の良い場所に設置し、感染を防止する</li> <li>・ストレス等を付加しないように、家族や団体は同じ場所に配置するように工夫することが必要。</li> <li>・個人情報を聞かれた場合等のマニュアルの作成が必要</li> </ul>
物品の提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物資提供できるものを、具体的にどのようなものかカードにして掲示する</li> <li>・物資の保管場所は物資を運ぶ導線に配慮する必要がある(2)</li> <li>・老人には毛布だけでいいのか、備蓄品を再検討が必要。</li> </ul>
施設閉鎖	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の閉鎖の方法を丁寧に考える必要がある(2)</li> <li>・帰宅の順番（特に外国人や遠方の観光客等）を考えることが重要(2)</li> </ul>
他機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣の住民から差し入れがあった場合、食中毒等の可能性を配慮した対応が必要</li> <li>・受け入れ人数の限界を超えた後、他の施設に誘導するには他施設との情報共有が不可決。(3)</li> <li>・他の受け入れ施設の情報を、ホワイトボード等に掲示することが重要</li> <li>・傷病者のために、近くの医療機関に紹介できるようにする</li> </ul>
KUGのゲームについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・係の役割が運用できなかった</li> <li>・Discord を設定したのに、実際に活用したゲームができなかったが、情報の共有しあう体制を作る必要がある</li> </ul>

## 5 まとめ

今回で KUG を用いたセミナーは 3 回、実施することができた。千代田学共同事業を担当する本学の社会連携室と。災害対応をする総務課との懸け橋となって、約 3 時間半におよぶワークショップが実施できた。前半は学生の学びのプレゼンテーションから入ったことにより、防災訓練という印象以上に、教育機関としての意義を加味しながら、学生は発信する形で実施できたことは良かったと考える。学生の教育活動としてワークショップを進める方が、訓練として独立して実施するより、肩に力もはいらず、適しているのかもしれない。

KUG の実施・運営に関わって、KUG を準備するプロセス、そして、その成果をまとめるプロセスがとても重要であることを痛感した。KUG の準備と円滑な実施、そして成果の可視化がマニュアルを作成する上で貴重な資料となっていくだろう。

今回、初めて Discord の活用を試みたが、KUG を実施することで精いっぱい、十分な活用はできなかった。各大学や地域の機関との連携やそのための Discord の意義については共有することができた。今後、各大学で同時に KUG を実施し、Discord を活用しながら、大学生どうしが情報の共有しあう体制を作っていくことを試みたい。自らの避難訓練ではなく、帰宅困難者支援という共助、公助の観点を合わせもつためか、専門分野を超えて共通した認識を持つことができた。今後も継続してそうした輪を広げていきたい。

## 参考文献

廣井悠・黒目剛・新藤淳 (2015) 帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発に関する研究, 東日本大震災特別論文集 No.4,67-70.

廣井悠[編・著], 中野明安[著] (2013): これだけはやっておきたい 帰宅困難者対策 Q&A, 清文社.

廣井悠[単著] (2013): 災害であなたが帰宅困難になった時のために, 清文社, 2013.

## 第5節 KUG実施後アンケートの結果について

堀 洋元（大妻女子大学 人間関係学部）

### 1 はじめに

本節では、2024年12月から2025年2月にかけて各大学で行われた帰宅困難者支援施設運営ゲーム（KUG）の実施後アンケート（以下、実施後アンケートと表記）結果について報告する。

### 2 方法

#### 2.1 場所および期日

2024年12月から2025年2月にかけて、以下の大学および短期大学にて実施した。二松学舎大学（2024年12月14日）、専修大学（2024年12月21日）、東京家政学院大学（2025年1月11日）、大妻女子大学（2025年2月8日）、共立女子大学および共立女子短期大学（2025年2月14日）の順に実施した。

#### 2.2 研究参加者

KUGの実施に先立ち、学生および教職員、地域住民に向けて研究参加を募集した。応募し当日出席した学生および教職員、地域住民は今回の研究内容について各大学の研究実施者から説明を受け、内容を十分に理解した上で参加するかどうかを自由意思で決定した。

#### 2.3 アンケートの構成

アンケート（質問紙）は表紙を含めて8ページ（A4サイズ）で構成された。設問は全部で12個あり、「KUGに関する評価」「図上演習に関する評価」「参加者に関する質問」「個人属性項目」に大別された。

#### KUGに関する評価

【設問1】東京大学廣井研究室、SOMPOリスクマネジメント株式会社による『帰宅困難者支援施設運営ゲーム(KUG)アンケート』（2019.5版）の7項目に加えて、新規に追加した2項目（項目2、3）を使用した。回答は5段階評定で、肯定的な回答ほど得点が高くなるよう数値化した。項目6～9は“あった”“どちらかというにあった”と回答した場合は自由記述で具体的内容に回答するよう求めた。

#### 図上演習に関する評価

【設問2】元吉他（2005）、松井他（2005）で作成されている「STEP ver 0.5に対する参加者の評価」11項目を使用した。STEPは広域災害における避難所運営訓練システムで、KUGと同様の図上演習である。回答は“よくあてはまる”から“全くあてはまらない”までの5段階評定で、質問にあてはまる度合いが高いほど得点が高くなるように数値化された。

#### 参加者に関する質問



【設問3】島崎・尾関（2017）による防災意識尺度20項目を使用した。この尺度は“被災状況の想像力”“災害の危機感”“他者指向性”“災害に対する関心”“不安”と呼ばれる下位尺度（各4項目）から構成されている。回答は“とてもよくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの6段階評定で、質問や下位尺度にあてはまる度合いが高いほど得点が高くなるように数値化された。防災科学技術研究所（2018）に回答フォーム、スコアの見方や集団ごと（行政職員、主婦、学生、防災リーダー、熊本地震被災者）の平均値が示されている。

#### 個人属性項目

設問4から12では、研究参加者の個人属性に関して尋ねた。【設問4】は年齢（数字で回答）、以下【設問5】性別（“回答しない”を含む3件法、【設問6】所属（6件法）、【設問7】所属大学（該当者のみ回答；6件法）、【設問8】KUG参加回数（数字で回答）、【設問9】ボランティア参加経験（2件法）、【設問10】参加したボランティア活動（該当者のみ回答；10件法）、【設問11】ボランティアネットワークグループへの参加意思（“参加してみたい”から“参加したくない”までの4段階評定）、【設問12】設問11の回答理由（自由記述）について尋ねた。設問10の選択肢はちよだボランティアセンター（<https://www.chiyoda-vc.com/>）のボランティア分野を参考に作成した。

## 2.4 実施の流れ

KUG実施後、研究参加者に配付したアンケート（質問紙）に回答するよう求めた。回答後、質問紙を回収した。回答時間は5～10分程度であった。

## 3 結果

### 3.1 KUGに関する評価

表3.5.1に基礎統計量を示す。今回のKUGに参加して“よかった”と回答しており（項目1\_1）、帰宅困難者への対応の“イメージ作りに役立った”（設問1\_4）、“認識を新たにすることがあった”（設問1\_5）と回答していた。また、参加したグループで“自分の意見を言うことができた”（設問1\_2）、“グループの雰囲気は良かった”（設問1\_3）と回答しており、円滑にKUGに参加していた。

KUGの運営・進行上の分かりにくい点、改善点（設問1\_6）について、“帰宅困難者カードと帰宅困難者コマが番号順に揃えていた方がスムーズに取り組める”との意見が散見された。カードとコマの番号を照合しながら進めていくことは参加者にとってストレスを来すことが窺えた。帰宅困難者カードの情報がより詳細だとイメージしやすいとの意見も複数みられ、“親子の内容、友人の人数、誰と誰が関係者なのか記載があった方がよい”“どの程度のケガなのかなど記載があるとよりイメージしやすい”“聴覚障害はろう者なのか、老化で補聴器が必要なのか”など具体的なアイデアが示されていた。必要な設定（設問1\_7）として“千代田区であるため、もっと会社員の人を増やしてもいいのでは”“男女混ざっているグループ、お父さんと娘、お母さんと息子など”“ペット連れの人や障害者”“トランスジェンダーの

方、LGBTQの方など受け入れて悩むかも知れない方の設定”“お断りした際のクレーム等は頻繁に発生するのでは”などが挙げられていた。他に必要なイベント（設問1\_8）として“帰宅拒否されたときの対応”“SNSなどで先に受け入れた方を訪ねてくる設定”“受付に行っていない人が勝手に大学内に入ってきた”“大きな余震が起こった”など、今回のイベントで体験しなかった内容がさまざま挙げられていた。キットに加えるべきもの（設問1\_9）として、“授乳、おむつ替えスペース”“パーティション等の仕切り”“物資カード”“大学近くの地図”などが挙げられた。

表3-5-1 KUGに関する評価の平均値および標準偏差

変数名	項目文	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
設問1_1	帰宅困難者支援施設運営ゲーム(KUG)に参加していかがでしたか	87	4.83	0.49	2	5
設問1_2	KUGの実施中、グループ内で自分の意見を言うことができましたか	87	4.37	0.78	1	5
設問1_3	KUGの実施中、グループの雰囲気はどうでしたか	87	4.68	0.58	3	5
設問1_4	KUGは、帰宅困難者への対応のイメージづくりに役立ちましたか	87	4.72	0.50	3	5
設問1_5	KUGに参加して帰宅困難者への対応について認識を新たにしましたか	87	4.84	0.40	3	5
設問1_6	ゲームの運営・進行上、分かりにくい点、改善の必要な点はありましたか	87	2.61	1.15	1	5
設問1_7	他に必要な帰宅困難者等の設定はありますか（除くべき設定はありますか）	86	2.60	1.18	1	5
設問1_8	他に必要なイベントはありますか（除くべきイベントはありますか）	86	2.73	1.23	1	5
設問1_9	本演習の小道具（キット）に加えるべきものはありますか	85	2.21	1.23	1	5

### 3.5.2 図上演習に関する評価

表 3.5.2 に基礎統計量を示す。“防災教育に役立つと思う”“学ぶことが多かった”“興味深かった”“参加意欲がわいた”が平均値 4.6 を超えており、今回実施した KUG をかなり肯定的に捉えていた。一方、“退屈した”“時間が長く感じた”とはとらえていない参加者が大勢を占めていた。

表3-5-2 図上演習に関する評価

変数名	項目文	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
設問2_1	興味深かった	86	4.71	0.61	1	5
設問2_2	退屈した	86	1.33	0.66	1	5
設問2_3	やり方はよく分かった	86	4.37	0.67	2	5
設問2_4	難しかった	86	3.78	1.22	1	5
設問2_5	もっとやりたかった	86	4.27	0.86	1	5
設問2_6	時間が長く感じた	86	1.94	1.08	1	5
設問2_7	防災教育に役立つと思う	86	4.77	0.50	3	5
設問2_8	現実味があった	86	4.22	0.82	2	5
設問2_9	実際はこんなものではないと思った	86	4.00	1.05	1	5
設問2_10	学ぶことが多かった	86	4.73	0.50	3	5
設問2_11	参加意欲がわいた	86	4.64	0.57	3	5

### 3.3 防災意識尺度

表 3.5.3 に基礎統計量を示す。項目文の左欄に下位尺度名を付記した。さらに表 3.5.4 には下位尺度得点の基礎統計量を示した。なお、下位尺度のうち“災害関心”得点は、素点の合

計を 28 から引いて算出した。

表3-5-3 防災意識尺度の平均値および標準偏差

設問名	下位尺度名	項目文	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
設問1_1	被災想像力	1 災害発生時に人々がどのような行動を取るか具体的なイメージがある	87	3.93	1.10	2	6
設問1_2	災害関心	2 自分の利益にならないことはやりたくない	87	2.22	1.16	1	6
設問1_3	被災想像力	3 災害発生時に必要となる物資の具体的なイメージがある	87	4.20	1.13	1	6
設問1_4	他者指向性	4 いろいろな友だちをたくさん作りたい	87	4.26	1.22	2	6
設問1_5	被災想像力	5 災害発生時に何がどうなるかの具体的なイメージがある	87	3.76	1.24	2	6
設問1_6	災害危機感	6 ひとたび災害が起きたら、大変なことになると思う	87	5.48	0.58	4	6
設問1_7	不安	7 自分は心配性だと思う	87	4.71	1.45	1	6
設問1_8	不安	8 不安を感じることが多い	87	4.28	1.44	1	6
設問1_9	災害関心	9 自分の身近なところで起きそうなことだけを考える	87	3.37	1.21	1	6
設問1_10	不安	10 災害の事を考え始めると、様々なパターンの被害を妄想してしまう	87	4.00	1.44	1	6
設問1_11	災害関心	11 普段は災害のことは考えない	87	2.79	1.30	1	6
設問1_12	災害危機感	12 災害は明日来てもおかしくない	87	5.32	0.87	3	6
設問1_13	災害危機感	13 個人の努力だけで災害の被害を減らすことは難しいと思う	87	4.53	1.40	1	6
設問1_14	不安	14 身の周りの危険をいつも気にしている	87	3.95	1.32	1	6
設問1_15	災害関心	15 災害対策は耐震補強や防災域の整備など物理的なもので充分だと思う	87	1.69	0.89	1	6
設問1_16	他者指向性	16 人とコミュニケーションを取るのが好きだ	87	4.31	1.11	2	6
設問1_17	災害危機感	17 防災は自分の地域だけで完結するのではなく、他の地域との連携も必要だと思う	87	5.47	0.79	2	6
設問1_18	他者指向性	18 人が集まる場所が好きだ	87	3.44	1.33	1	6
設問1_19	被災想像力	19 災害発生時に自分がどのような対応をすればよいか具体的なイメージがある	87	3.87	1.22	1	6
設問1_20	他者指向性	20 他の人のために何かしたいと思う	87	4.87	0.97	2	6

島崎・尾関（2017）が尺度作成時に収集した全国 618 名分の平均値と標準偏差は、“災害関心”（M=14.62,SD=2.57）、“災害危機感”（M=17.70,SD=3.30）、“他者指向性”（M=13.20,SD=3.53）、“被災想像力”（M=12.98,SD=3.30）、“不安”（M=14.834,SD=3.27）”となっており、いずれの下位尺度得点も今回の参加者の平均値が上回っていた。この傾向は島崎・尾関（2017）による全データだけでなく、主婦や学生、行政職員の平均値よりも高いだけでなく、熊本地震の被災者平均をも上回っていた。

表3-5-4 防災意識尺度（下位尺度）の平均値および標準偏差

下位尺度名	有効N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
災害関心	87	17.93	2.99	9	24
災害危機感	87	21.00	2.52	15	24
他者指向性	87	16.89	3.46	11	24
被災想像力	87	15.76	3.65	8	24
不安	87	16.94	4.23	6	24

### 3.4 個人属性項目

年齢【設問 4】平均年齢は 28.37 歳、性別【設問 5】は男性 33 名(37.9%)、女性 51 名(58.6%)、回答しないが 2 名(2.3%)、無回答が 1 名(1.2%)であった。

所属【設問 6】は大学生 62 名(71.3%)、大学職員 19 名(21.8%)、大学教員 4 名(4.6%)、千代田区内在勤 1 名(1.2%)であった。学生および教職員の所属【設問 7】は専修大学 32 名(36.8%)、二松学舎大学 19 名(21.8%)、東京家政学院大学 15 名(17.2%)、大妻女子大学 11 名(12.6%)、共立女子大学・共立女子短期大学 6 名(6.9%)、法政大学 1 名(1.2%)、無回答 2 名

(2.3%)、非該当 1 名であった。KUGの参加回数【設問 8】は初めてが 61 名(70.1%)で最も多く、2 回目が 15 名(17.2%)、3 回目が 9 名(10.3%)、4 回目が 1 名 ((1.2%)と続いた。無回答は 1 名であった。

ボランティア経験【設問 9】は“ある”が 51 名(58.6%)、“ない”が 34 名(39.1%)、無回答、非該当がそれぞれ 1 名みられた。具体的なボランティア活動経験【設問 10】は“高齢者に関わる活動”が 8 名 (9.2%)、“子どもに関わる活動”が 27 名(31.0%)、“障がいに関わる活動”が 9 名 (10.3%)、“在日外国人支援・国際交流に関わる活動”が 4 名(4.6%)、“多世代交流に関わる活動”が 3 名(3.5%)、“まちづくりに関わる活動”が 16 名(18.4%)、“災害支援に関わる活動”が 23 名(26.4%)、“環境保全に関わる活動”が 14 名(16.1%)、“当事者支援に関わる活動”が 3 名 (3.5%)、“その他”が 1 名(1.2%)であった。ボランティアネットワークへの参加意思【設問 11】は“参加してみたい”“どちらかといえば参加してみたい”を合わせると 62 名(71.2%)、“参加したくない”“どちらかといえば参加したくない”を合わせると 22 名(25.3%)無回答が 2 名、非該当が 1 名であった。ボランティアネットワークに参加してみたい/参加したくない具体的理由について表 3.5.5a~5c にまとめた。

表3-5-5a ボランティアネットワークに参加してみたい/参加したくない理由

参加したい理由(n=16)

自分でボランティア活動に位置から参加したり始めるのは難易度が高いので、他の人と一緒にできるというのは心強いしコミュニケーションの場にもなる  
 今回体験してみて、様々な自分の知らないことについて知って体験することが重要だと感じたから  
 何かできることがあるはずで、それをすることで助かる人がいるかも知れない  
 有事の際にどのようなことができるか知る場所がほしいから  
 ボランティアとして参加する際、情報共有をするツールが必要と感じたから  
 多世代の方と少しでも意見交換を行ってみたいため  
 情報を共有することができるため  
 様々な世代の人から知識を得たい  
 ボランティアに関わる方々と交流を深めていきたいから  
 情報社会において様々な共有方法や方法の長所、短所を知っておいた方が良いと思う  
 ネットワークは大切だと思うから  
 ボランティアについて興味を持っているため  
 民子さんの話もうかがい、周囲との助け合いや情報が大切だと感じたため。  
 気軽に参加できて人の役に立てるなら参加してみたいと思ったから。  
 その地域に住む人や観光で来る方などの様々な視点からの意見を聞けると思ったから。  
 自分で直接行くのが難しい時にも参加できるから。

表3-5-5b ボランティアネットワークに参加してみたい/参加したくない理由

参加したくない理由(n=7)

本来取るべき連絡と混ざってしまうため  
 LINEチャットで実在が見えない  
 実際に対面してコミュニケーションを取りたいため。また体を一緒に動かして取り組みたいため  
 情報が多すぎて上手く自分が活用できないと思うから  
 時間がないから  
 今が関心がないので  
 特に千代田区キャンパスコンソーシアムにおける取組や千代田区との取り組みにおいては横の連携が必須となってくると感じる。また、そうすることで災害時に二次、三次災害の抑制にもつながると感じたため



表3-5-5c ボランティアネットワークに参加してみたい/参加したくない理由

どちらかといえば参加したくない理由(n=11)

グループに参加していると自分が携わることができない出来事に関する情報も入ってきてしまい、その仕分けが大変なため自分で探したいからあまり気が進まない  
 まだLINEを使い始めたところなのでチャットは文字しかないのでコミュニケーションが取りづらいと思います。こういうのはZoomやオフラインの方がいいのではないかと個人的に思います  
 よく分からないから  
 LINEでコミュニケーションをとることが好きでないため  
 今が時間がない、実際に体験しないと、危機感がない  
 オンラインでどの程度利用できるか不明だと思うため  
 地域でのグループ作りにも有効だと思う  
 オンライン上で何をやるのか、何が出来るのか想像できない、実践の方がいいと思う  
 ボランティアとしては参加したいが、年齢的に新たなネットワークやグループに加入することに不安がある。

どちらかといえば参加したい理由(n=35)

役立つことがあると感じたため  
 今回のように実際に経験してみると想像とは全く違うということが分かったから。経験してみると、もっとこうの方が良いという反省点も見つかるし、実践する場になったらそれを活かすことができると思った  
 何も知らない状態よりは少しでも情報が知れる状態でありたいため  
 どのようなボランティアがあるのかを知りたいから。そこに参加している人の考え方も知れるはずだから  
 オンライン上における用途を理解した上で同意できるのであれば参加したい  
 誰かの役に立てるかも知れないから  
 オンライン上であれば自分と同じような考えを持っている人と関わることができる可能性が大きいと思うから  
 少し興味はありますが、相手の情報が分からないため不安要素が多いと思ったからです  
 何かのボランティアに関する連絡網があるなら情報共有をしたいから  
 自分と同年代の人が災害に対してどのような意識を持っているのか興味があるから  
 具体的にどのような内容なのか興味を持った  
 ボランティアとして活動するには人とのつながりによって情報共有が必要だと思うから  
 情報が欲しいから  
 ボランティアのネットワークグループがあれば自分が知らなかったボランティアも興味を持ち、参加できる機会が増えると思うから  
 情報共有ができて便利だから  
 自分のボランティアに参加できる頻度が増え、誰かの役に立つことができると思うので、すぐネットワークグループ参加してみたいです。しかし、ネットワークということでデマだったりあまり信用し過ぎるのは不安という点からどちらかといえばを選ばせていただきました。本日はありがとうございました。  
 色々な人と情報共有してみたいため  
 どのようなボランティアがあるのか気になる。どのくらいの人が参加しているのかも知りたい  
 ライン上では参加したことがないので、どのようなものが興味がある  
 知識を得たいから  
 現地には行けなくても、Lineならば参加できるから  
 ボランティアは時間や費用等のハードルがあるため、オンラインであれば、そのようなハードルがないと考えたため  
 情報はあるにこしたことはないため、情報収集は大切  
 困っている人に対して、自分にできることをしたいから。力になって少しでも助けになりたいと思うから  
 視野を広げたいと思ったから  
 ボランティアについての情報を得る機会が少ないため  
 気軽に参加することができそうだから  
 普段の生活ではなかなか経験できないことを学ぶことができるため  
 オンライン上で参加するよりも対面で参加したいと思いました  
 ボランティア参加で問題に対してより現実的に自分事として考えられると思うから  
 有事の際に役立つと思われるため  
 交流などは得意ではないですが、ボランティアには興味がある。  
 自分が困ったときに参考になると思ったから。  
 有益な情報が得られるのであれば参加したいと思っています。  
 これから必要なことだと考えられるから、グループの有効期限などは要検討か。



#### 4 まとめ

本節では、今年度5つの大学（短期大学を含む）で行われたKUG実施後のアンケート結果を整理した。KUGに関する評価項目、図上演習による評価項目の結果から、これまで本事業で実施したKUGと同様の評価が得られていた。一方、運営・進行上で分からない点や改善点について、多くの意見が得られた。本章にあるとおり、KUG実施の大枠は統一されているが、KUGを実施するまでの導入コンテンツが大学ごとに異なることもあり、今後研究を継続する上で検討する余地がある。今回の参加者のうち、約7割がボランティアネットワークへの参加意思を示していた。参加してみたい理由の中に、ボランティア同士での交流や他者とのコミュニケーションに積極的な姿勢が見受けられた。また、情報共有の便利さや有効性を見出している者が多くみられた。一方、参加したくない者の中にはオンラインでの参加に対する抵抗感や、オンラインよりも対面によるコミュニケーションを重視したい考えを示す者がみられた。今回行われたKUGの中でもオンラインネットワーク上での情報共有を試験的行った大学もあり、KUGの中でオンラインネットワークの実践例を示していくことも有用であり、アナログな図上演習にDXを今後どのように取り入れていくかが今後の課題である。

#### 引用文献

防災科学技術研究所（2018）防災意識尺度 社会防災研究領域災害過程研究部門  
<<https://www.bosai.go.jp/katei/products/pdf/ADCscale20171122D2.pdf>>（2025年2月28日）

松井豊・竹中一平・新井洋輔・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・元吉忠寛・堀洋元  
（2005）広域災害における避難所運営訓練システム（STEP）の開発過程と効果検証，筑波大学心理学研究，30，43-49.

元吉忠寛・松井豊・竹中一平・新井洋輔・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元  
（2006）広域災害における避難所運営訓練システムの構築と防災教育の効果に関する実験的研究，地域安全学会論文集，7，425-431.

島崎敢・尾関美喜（2017）防災意識尺度の作成（1），日本心理学会第81回大会論文集，69.

補注 本研究は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を得て実施された（受付番号 06-016）。

